

English Garden 第79話

"In the course of justice, none of us/ Should see salvation."

William Shakespeare

「正義一途では、われら誰も救いにあずかることはできない」

シェイクスピア「ヴェニスの商人」

前回の「ヴェニスの商人(The Merchant of Venice)」の続きで、法廷の場からです。

親友のアントーニオからお金を借りてポーシャに求婚したバッサーニオは、首尾よくポーシャと結婚しました。一方、ユダヤ人のシャイロックから借金してバッサーニオに用立てたアントーニオのもとには、荷を積んだ彼の船がことごとく難破したという知らせがとどき、期日までに借金を返すことができなくなりました。シャイロックは契約通りアントーニオの体の肉1ポンドを要求して裁判を起こします。夫の親友の一大事を知ったポーシャは、裁判官に変装して法廷に乗り込みました。表題の言葉は、あくまでも契約の履行を要求するシャイロックをいさめる裁判官ポーシャの演説の一節です。この演説は、慈悲の心をうながす次のような名文句で始まります。

The quality of mercy is not strain't,
It droppeth as the gentle rain from heaven
Upon the place beneath:

慈悲というものは強いられるべきではない。
慈雨のように天からこの大地へ降りそそぐものだ。

この演説の中で裁判官は、人の世は正義ばかりでは成り立たないことを説き、何倍にもして返すというバッサーニオの申し出を慈悲をもって受け入れ、裁判を取り下げるよう求めますが、シャイロックはあくまでも証文通りのかたを要求します。そこで裁判官は是非なく一旦は「当法廷はそれを認める」と宣言したのち、逆転の名せりふを続けます。

Therefore prepare thee to cut off the flesh.
Shed thou no blood, nor cut thou less nor more
But just a pound of flesh.

だからして、肉を切り取る用意を。血は流すなよ。
切り取るのは少しの過不足もなく、きっちり1ポンドの肉だぞ。

この判決でシャイロックは全面的な敗訴となった上に、キリスト教徒に危害を加えようとした罪であわや全財産を没収ということになりますが、慈悲によって許されました。

この作品は喜劇という形をとっているものの、人肉契約という重い特異なテーマを扱っているため、法的な観点からもさまざまな論議を呼んでいます。小室金之助著『シェイクスピアの謎 - 法律家のみたシェイクスピア』(株)三修社、1997年刊)の中でも、日本をはじめ世界各国の研究者のいろいろな意見が紹介されています。それによると「人肉契約は良俗に反しているため無効である」という見方が基本であり、「ゆえに裁判官はこの理由で契約の履行を拒否するべきであった」という厳しい指摘や、「中世においては債務者が自ら過酷な制裁を約束することは自由だったから有効であった」との見解などもあります。いずれにしても、現代の我が国の法律では、「公の秩序、善良の風俗に反する法律行為であるから、文句なく無効である」と著者は結論づけています。

